

わが国の進水記念絵葉書

正会員 碓崎 貞雄*

Launching Commemorative Postcard of Japan

by Sadao Kakizaki, Member

Key Word: Commemorative Postcard, Launching Ceremony, Japanese Culture

1. 緒言

本論では、わが国の進水式で関係者に進呈されたり参観者に頒布されて進水式に彩りを添えてきた進水記念絵葉書について述べる。

わが国に先行した欧米の進水記念絵葉書は絵葉書専門店が販売を目的にニュース性の高い大艦巨船の進水式を写真版絵葉書にしたものであったが、メディアの発達と共に1940年頃に見なくなった。

わが国の進水記念絵葉書は造船所が進水する船ごとに完成予想図とその船に因んだ多色刷りの創作図案を描いたもので、発行が減少しているが明治39年から約110年も続いている。

2. 誕生前夜

わが国では明治33年に郵便で私製絵葉書の使用が認められると、欧米にならって絵葉書が発行された。印刷技術が発達すると有名画家などによる多色刷りの美術絵葉書や風刺画絵葉書などが人気を呼び、新聞社による絵葉書の高額な懸賞募集、大規模な交換会、専門書の出版なども行われて、絵葉書を「掌中の玩」として鑑賞し愛でる絵葉書ブームとなった。収集家に夏目漱石、尾崎紅葉、大町桂月などの著名人の名が見られ、当時の絵葉書は国内の美術館やポストン美術館にも所蔵されている。

わが国の記念絵葉書は明治35年に通信省から発行された6枚組専用封筒付「万国郵便連合加盟25年記念」が最初である。日露戦争が勃発すると明治37～38年に8回49種類の記念絵葉書が発行され、勝ち戦もあって熱狂的な人気を呼び、発売日に郵便局で求めんとする人が押しかけ騒動が起すほどであった。

明治38年7月に英国ヴッカーズ造船所に発注していた戦艦香取の進水式が有栖川宮ご夫妻を迎えて盛大に行われ、現地の絵葉書専門店により



Fig.1 Launching Commemorative Postcard of Battleship Katori

* 関西支部造船資料保存委員会委員

複数の白黒写真版の進水記念絵葉書が発行された。その中の一つを三越呉服店が複製して、Fig.1に示す進水記念絵葉書を国内で販売した。手元にある同絵葉書の郵便消印を見ると日付が早いものは明治38年10月、遅いものは39年5月、郵便局名が東京、佐世保、大分など、相当長期間にわたり広く販売されたことが判る。これにより進水記念絵葉書の存在が知られるところとなった。

3. 誕生

進水記念絵葉書について図案などを紹介した文献はあるが、最初に発行された絵葉書や発行目的などについて論じた文献は見当たらない。ここでは最も初期に発行され、後への影響が大きかった横須賀海軍工廠で進水した戦艦薩摩の進水記念絵葉書について述べる。

3.1 発行の背景

日露戦争が明治37年2月に勃発して早々の5月15日にロシアの戦艦7隻を擁する旅順艦隊をけん制行動中に戦艦八島と初瀬が触雷し沈没した。当時は戦艦の隻数が海戦の勝敗を決めると考えられていた時代である。わが国の保有する戦艦6隻のうち2隻を一挙に失う事態は海軍のみならず国民も震撼する大事件であった。

それまでの国内最大建造艦は、横須賀海軍工廠の海防艦橋立(4,500トン、工期74ヶ月)と呉海軍工廠の巡洋艦対馬(3,500トン、工期28ヶ月)で、喪失した戦艦の代わりを国内で急速建造することは常識的に不可能である。しかし海軍は非常な決心を以て明治37年6月に呉海軍工廠に13,970トンの装甲巡洋艦筑波を工期24ヶ月、同生駒を工期30ヶ月で建造を訓令した。

さらに戦艦8隻を擁するロシア・バルチック艦隊の本国出撃の報に接すると、38年1月に19,700トンの戦艦薩摩と安藝、14,870トンの装甲巡洋艦鞍馬と伊吹をそれぞれ横須賀と呉の海軍工廠に建造を訓令し、両工廠の能力から先ず戦艦薩摩の建造に全力を注いだ。

本艦は日露戦争には間に合わなかったが、日本海海戦大勝後最初の、講和成立後最初の、そしてわが国最初でかつ世界最大の戦艦として明治39年11月15日に進水式を迎えた。明治天皇は自ら皇太子殿下と皇族方とともに台臨され、内外の貴顕高官淑女も招待し、工廠構内だけでも6万人余の観衆が集まる大進水式が挙行された。

この良き日に横須賀海軍工廠の外郭団体である同工廠職工共済組合が進水記念絵葉書を制作し、進水式の来賓や関係者に進呈すると共に、工廠の構内2か所と正門近くの将校クラブである水交社で進水式参観の希望者に頒布した。

3.2 絵葉書の紹介

進水記念絵葉書は Fig.2 に示す 3 枚の絵葉書と「大日本軍艦薩摩進水記念」と書いた半透明薄紙の専用封筒で構成されている。

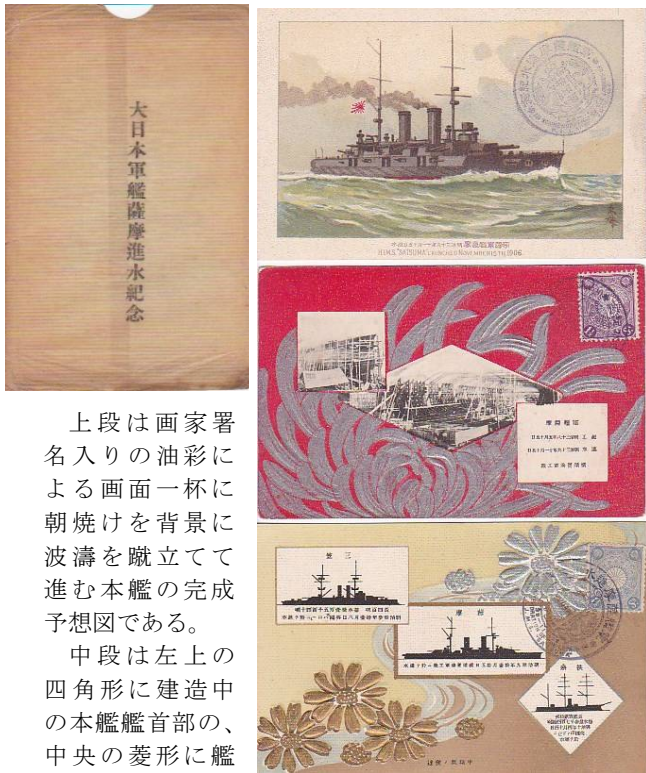


Fig.2 L.C.P.¹⁾ of Battleship Satuma

上段は画家署名入りの油彩による画面一杯に朝焼けを背景に波濤を蹴立てて進む本艦の完成予想図である。

中段は左上の四角形に建造中の本艦艦首部の、中央の菱形に艦中央部の写真を配し、右下の四角形の中に本艦の艦名、起工日、進水日、それに建造造船所である横須賀海軍工廠の名が記述され、背景に吉兆の赤色の中に進水月の菊月に因む大輪の菊花が描かれている。

下段は「甲鉄艦の発達」なる表題があり、左上の四角形に英国に発注し明治 33 年に進水した排水量 15,140 トンで日露戦争の連合艦隊旗艦を務めた戦艦三笠の、右下の菱形に英国に発注し明治 10 年に進水した排水量 3,740 トンのわが国最初の甲鉄艦扶桑の、中央の四角形に排水量 19,370 トンの本艦のシルエットを、それぞれ大きさに比例して描いている。背景に右上から左下に曲水を描き、右上には白菊を左下には黄菊を配している。

中段と下段の菊花と曲水の図は立体的に見えるように、裏から型押しされてその部分が盛り上がっている。

これらは進水する巨体を見ても想像することは難しい完成時の姿や、どのように造られたか、造船技術の長足の進歩、主力艦の急速な大型化などを分かり易く解説したものである。

戦艦薩摩の建造は国家の命運を担って常識的に不可能なことに挑み、進水にこぎ付けた時には状況は一転して日本海海戦の大勝利、講和条約締結が確定する中で朝野あげての大進水式となった。本艦建造にたずさわった人々の喜びと誇りを容易に推し量ることが出来る。

わが国には祝事に赤飯を炊いてお世話になった方に配り喜びを分かち合う習慣がある。彼らは絵葉書ブームの中で進水記念として進水記念絵

葉書を制作し、来賓や参観者に頒布して喜びを分かち合ったと考えることが出来る。

当時の横須賀海軍工廠はわが国造船界のトップリーダーであった。進水の喜びを分かち合う進水記念絵葉書は他の海軍工廠や民間造船所の共感を呼び、戦艦薩摩進水の翌月から全国の造船所で堰を切ったように進水記念絵葉書が発行されるようになった。

4. 変遷

戦艦薩摩の進水記念絵葉書から現在の進水記念絵葉書に至る変遷を述べる。

4.1 進水記念絵葉書の種類

進水記念絵葉書は造船所が発行する多色刷り絵葉書が発行隻数・発行部数からみて主流であるが、第 2 次大戦以前は次に述べるような絵葉書も発行されていた。

造船所発行のもので、数は少ないが進水する船体と式場や滑り下りる船体を写した写真版絵葉書が残っている。これには印画紙版と印刷版があり、前者は進水式直後の祝宴で来賓に、後者は進水後関係者に進呈したものと思われ、発行隻数・発行部数共に少ない。他に第 2 次大戦直後に造船が再開された時の進水記念絵葉書に、物資拵底の折とて印刷インキ入手が難しかったと見え、油彩の完成予想図を写真に撮った印画紙版絵葉書がある。

絵葉書専門店が発行した進水記念絵葉書もある。造船所発行の進水記念絵葉書は進水式の入場者しか入手できないので、進水式に行けなかった人々の需要に応じて発行したものである。第 2 次大戦前は大型艦の進水式は国家の慶事とされ全国民の関心が高く、複数の有名絵葉書専門店が競って発行した。商船でもニュース性が高いものは造船所所在地の絵葉書専門店が発行した。いずれも販売のため造船所発行のものに比較して図案の傾向が異なり装飾性が強い。多色刷版と写真印刷版がある。

4.2 進水記念絵葉書の変遷

わが国の進水記念絵葉書の特徴に欧米では見られない「包む」がある。わが国には品物を進呈する時に丁寧に包む特有の文化がある。絵葉書の包み方は「専用封筒」、包む「タトウ」、挿み込む「ポケット付ファイル」、綴る「ブックレット」方式と変わった。この変遷を示したのが Table 1 である。

初期の専用封筒は Fig.2 に見るように、薄紙でやや硬い半透明の上質紙に 0.05~1.0mm の細かい布目の型押しをしたものが多い。その中で大正 2 年に三菱長崎で進水した大型客船安洋丸(9,500 総トン)の封筒は、お祝いに贈る産着に使われる「麻のようにすくすく伸びよ」の意味の

Table 1 Change of “Tsutsumu” Style on L.C.P.

型式	封筒		タトウ		ポケット付ファイル	ブックレット
			A	B		
用紙	薄紙	普通紙	普通紙	普通紙	普通紙	葉書紙
明治期	↓					
大正期		↑	↑↓	↓		
昭和初期				↓	↓	
昭和20年代					↓	
昭和30年以降						↑↓

1) Lunching Commemorative Postcard

細かい「麻の葉」文様の型押しを、大正 4 年に川崎神戸で進水した貨客船はわい丸の封筒は「穏やかな海、恵みをもたらす海」への願望を込めた「青海波」文様の型押しを全面にした凝ったものも見受けられる。

大正期に入ると破れやすい薄紙に代わって丈夫な普通紙が用いられるようになった。始めは表に「進水式記念絵葉書」の表題に船名、造船所名、進水年月日などの文字だけであったが、後に船名、進水月、建造、船主などに由来する図案も描くようになり、以降のタトウ、ポケット付ファイル、ブックレットの表にも図案を描くようになった。

Fig.3 に大正 4 年に三菱長崎で進水した富山丸の普通紙専用封筒付 2 枚組進水記念絵葉書を示す。本船はわが国建造の大型貨物船で初めて欧米の水準に達した 7,500 総トン級 T 型貨物船



Offered by MHI Nagasaki
Fig.3 L.C.P. of Cargo Ship Toyama Maru

の一隻である。当時 1,000 総トン以上建造可能な船台は全国で 17 本しかなく、特に本船のような大型で優秀な貨物船の建造は造船所にとって大きな誇りである。

上の 2 枚が絵葉書で最下段が普通紙専用封筒である。中段の絵葉書には船台で建造中の本船写真が誇らしげに掲げられ、封筒の表には船台上の本船の断面図が図案化されている。

普通紙専用封筒に少し遅れて、絵葉書を丁寧に四方から包み込む「タトウ A」方式も併用された。正式な文書などを包む伝統の包み方である。

この方式は包むのに手間がかかることから、四隅を切り詰めて簡便に包むことができる「タトウ B」方式が昭和期始めから第 2 次大戦中にかけて多く用いられた。この包み方は着物を包むのに多く用いられている。

また「タトウ B」と同じくして、より収納に簡便な「ポケット付ファイル方式」が考案され、昭和 20 年代に最も多く使われた。これは二つ折りにした表紙の裏表紙に絵葉書を挿入するポケットを付けたものである。「包む」から「挿む」への大変革である。

昭和 20 年代前半になると各造船所ごとに様々な方式が試みられたが、同 20 年代後半に現在の主流である綴る「ブックレット」方式に定着した。本方式では従来の本船に関連した図案を描く絵葉書の図案が表表紙に描かれ、絵葉書の方は省略された。その表表紙を三菱神戸のように絵葉書として使えるようにしたものもある。

Fig.4 に昭和 39 年に名村で進水した木材運搬船瑞雲丸



Fig.4 L.C.P. of Lumber Carrier Zuiun Maru

の進水記念絵葉書を示す。表紙は貨物である南方産の巨木の断面を図案化したもの、2 頁目は本船要目表、3 頁目は完成予想図を描く絵葉書で左辺のミシン目を介した耳紙を裏表紙に糊付けしている。

5. 図案

欧米の進水記念絵葉書で多色刷りは少ないが、わが国では多色刷りが主流である。多色刷りの絵を手にとって鑑賞するのは庶民文化の浮世絵が思い出される。

明治から昭和 20 年代前半までは、Fig.2 や Fig.3 に見る多色刷りの完成予想図を描く絵葉書と本船に関連する図案を描く絵葉書に、封筒、タトウ、またはポケット付ファイルで構成されてきた。

昭和 20 年代後半にブックレット方式となると、Fig.4 に見るように、本船に関連する図案はブックレットの表紙に描かれるようになった。

5.1 完成予想図を描く絵葉書

進水記念絵葉書で完成予想図を描くのはわが国だけの特徴で、ペン画や水彩画もあるが細部まで描くことが出来る油彩画が好まれた。進水式で来賓や参観者が目の大きな鉄の塊を見て完成状態を想像することは難しく、Fig.2 に示すように画面一杯に大きく描いて素晴らしさを理解してもらうことが望ましい。

しかし当時の石版印刷では微妙な色合いを細かく表現するのは難しくコストと時間がかかる難点があって、Fig.3 の上段の絵葉書に見るように完成予想図を絵葉書の数分の 1 の面積に単色で描くことが多かった。

Fig.3 上段の絵葉書では、その背景に船名と進水月に由来して富山・魚津の海に有名な蟹気楼に因み、蟹気楼文様一大蛤が吐く気が楼閣を形造る一を採り、大蛤の貝殻の中に単色で本船完成予想図を描き、背景に蛤が噴き出した蟹気楼の中に水平線に浮かぶ楼閣を描いている。

完成予想図を画面一杯に描く絵葉書の発行状況を Fig.5 に示す。本図を見ると完成予想図を画面一杯に描くのが一般的になるのは、印刷技術が発達する昭和 10 年代まで待たなければならなかったことが判る。その間は完成予想図を Fig.3 のように単色で絵葉書画面より小さく描き、その余白・背景に船名に由来する図案、進水月や季節、吉祥図案などを描いた。

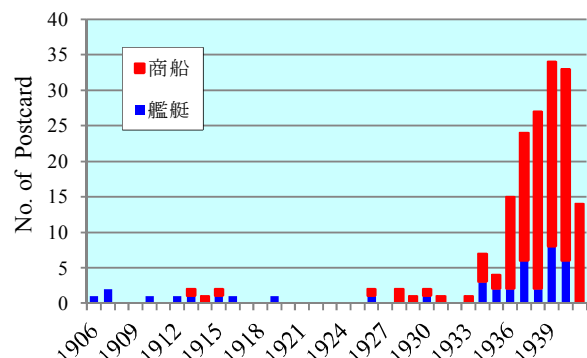


Fig.5 Big Ship Figure on L.C.P.

完成予想図は絵画としての美しさと正確な姿が求められる。現在のように三次元設計支援システムがない時代に、進水の時点で一般配置図などの平面図から本船の完成した姿を描くには、図面を読む能力と船についての深い知識が求められる。

描く画家の出身を見ると、文化勲章を後に受賞した洋画家の和田英作、日本画の斉藤松洲、大阪商船の専属画家の大久保一郎、海洋画家の松添健などがおられるが、造船所に勤務中、もしくは勤務された方が多い。これら画家の個性と筆力が進水記念絵葉書の魅力を高め奥深いものにしていく。

しかし近年は同型船が増えるにつれ、完成予想図の代わりに姉妹船の完成写真流用も多くなっている。

5.2 本船に関連する図案を描く絵葉書

本絵葉書の主題は昭和10年代前半までは本船建造について特筆すべき技術的なものを取り上げ、その写真を絵葉書の約半分の面積で示し、背景に船名に因む良く知られた物語・俳句・短歌、進水月や進水式、就航航路などに由来する図案や伝統の装飾文様を描いている。

昭和一桁台前半まではFig.2とFig.3に見るように船台で建造中の本船写真が多い。第1次世界大戦が勃発すると造船ブームとなり次々に大型船が建造されるようになって、習慣となって建造中の本船写真がみられるが、昭和一桁後半以降は激減した。

また明治から大正初めにかけては、国産化になった往復動蒸気機関・蒸気タービン・蒸気ボイラ、大型船建造のための最新設備であるガントリクレーンや大型クレーンなども見られ、昭和に入ると10年代の初めまで技術提携して製造したディーゼル機関が見られる。

Fig.6の上段は昭和12年に三井玉野で進水したニューヨーク航路高速貨物船有馬山丸の絵葉書で、主題に本船に搭載した新開発の高性能B&W型ディーゼル機関の初号機を描き、背景にニューヨーク・マンハッタン島の摩天楼を描いている。

昭和10年代に入り船体建造に関する設備や主機関の開発が一段落すると、船名、航路、用途・ミッションなどに由来する図案が絵葉書画面一杯に描かれるようになる。

Fig.6の中段は昭和12年に大阪鉄工(後の日立桜島)で進水した鯨工船第2号南丸の絵葉書で、南水洋で操業する本船に冰山と鯨の大きな尻尾を描いている。



Fig.6 Related Picture of the Ship Postcard

Fig.6の下段は昭和16年4月に播磨で進水した貨物船金耶摩丸の絵葉書で、進水式で薬玉が割れ五色のテープと紙吹雪に鳩、進水月に因み満開の桜花を描いている。

5.3 ブックレットの表紙

ブックレット方式表紙は専用封筒、タトウ方式、ファイル方式の表紙と、5.2項で述べた昭和10年代以降の本船に関連する図案を描く絵葉書と合体したものになっている。近年はイラストレーション分野の進歩・発達により洗練された図案

が多く、表紙も完成予想図の絵葉書と共に進水記念絵葉書の大きな魅力になっている。

Fig.7の上段は昭和51年に三菱下関で進水した物理探査船開洋丸の表紙で、探査作業によるデータを電算処理して得られた海底面下の地質断面構造図を描いている。

中段は昭和57年に三菱神戸で進水したコンテナ船箱根丸の表紙で、船名に因んで歌川広重の東海道五十三次から「箱根湖水」を描いている。



Fig.7 Cover of L.C.P.

下段は平成25年に川崎神戸で進水したばら積貨物船Orient Irisの表紙である。山手から神戸港を俯瞰した写真で手前の高層ビル群の向こうに、本船が建造された船台やクレーン、メリケン・パークのポートタワーや神戸海洋博物館が見て取れる。

6. 結 び

わが国の進水式で頒布される進水記念絵葉書は、慶びの良き日にささやかなものを関係者に配り、喜びを分かち合う文化によって生まれ継承されて110年の歴史を刻んできた。

画家による完成予想図を描く絵葉書と、船名に因む良く知られた物語・俳句・短歌、就航航路、ミッションなどに由来する図案や伝統的な文様などをユニークな構図や図柄で描く絵葉書や表紙は、人々に愛でられ「掌中の玩」として大切にされている。また造船技術の進歩や海運・造船界の動向が垣間見えるのも興味深い。

このような進水記念絵葉書は世界に例がなく、わが国の進水文化の一つの特徴である。

謝 辞

本論作成に当たって造船資料保存委員会内藤委員長、藤村委員長代行、各委員の方々および三菱長崎造船所史料館横川館長にご指導・ご支援を頂き、また多くの方に資料の提供、調査の協力を頂きました。ここに厚く御礼を申し上げます。